The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	心理テストによる大学生の精神的不健康予知
Author(s)	辻本, 太郎
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32029
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【28】

氏名・(本籍)	辻本太郎（つじもと たろう）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 4156 号
学位授与の日付	昭和53年2月22日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**心理テストによる大学生の精神的不健康予知**
論文審査委員	(主査) 教授 金子 仁郎 (副査) 教授 朝倉新太郎　教授 後藤 稠

論文内容の要旨

〔目　的〕

大学生時代は青年期後期に相当し，個人にとり身体的，精神的，社会的変化の著しい時期であるので，心理的にも不安定で精神障害の1つの好発期である。大阪大学においても，病気休学者の理由としては精神障害が，また死亡者では，自殺が圧倒的に多い。このような点を考慮すれば，精神障害学生の早期発見，早期治療は言うにおよばず，その精神障害発生前に，精神的な不健康因子を発見して，精神障害発生を予防することが重要な課題となる。

大阪大学ではこれらの対策の一環として，精神衛生面のスクリーニングの目的でUPI (University Personality Inventry) およびSCT (Sentence Completion Test) を施行している。より簡便なUPIについては，基準化がまだ確立されていない。今回この2つの心理テストについて，男女間および学部間の反応の相違を解析するとともに，テスト施行後に発生をみた自殺，精神障害，あるいは留年との関連性を調べ，これらの心理テストの有用性について，総合的な検討を行った。

〔方法ならびに成績〕

対象は昭和45年・46年・47年度大阪大学入学生で，入学時にUPIおよびSCTを施行した。入学者総数は5981名，そのうち心理テストの提出者総数は5805名（全対象者の97.1%）であった。

まずUPIで各項目のチェック数，男女差，学部差を検討し，学部差に関しては，主成分分析を用いてさらに詳細な検討を加え，ＳＣＴにおいても同様に一般的な特徴，男女差，学部差について検討した。その結果UPI，SCTともに男女差，学部差を認め，さらに主成分分析を用いた学部別の特徴では再現性も認められた。

UPIの昭和45年度全入学生の平均チェック数は17.9,チェック項目数20以上が40.5%，30以上が13.5%であるのに対して，直接把握された精神障害学生(当センター受診者および連絡のあった学生)のそれは，平均チェック数25.6，20以上70.5%，30以上29.5%と，両者間に明らかな差を認めた。この直接把握された自殺および精神障害学生（64名中テスト提出者61名）のうち，自殺，精神分裂病およびその疑い，うつ病およびうつ状態，精神神経症について項目別反応率を調べ，そこから自殺者，精神障害者のスクリーニングのための重要項目得点表を考案作製し，予知の可能性を検討した。その結果上記精神障害のどれもが，それぞれの疾患項目にピークを持ち，そのうち自殺，うつ病圏疾患，精神神経症については，信頼性も認められた。ＳＣＴの分析については，形式面，性格面，対人関係面についてチェックし，そこから総合判定を行ったところ，全ＳＣＴ提出者中，問題ありとされた者は16.0%であるのに比し，精神障害学生のそれは41.7%と有意に多かった。またこのUPIとSCTの併用から「要注意」とされた者（UPI30項目以上チェックし，しかもＳＣＴで問題ありとされた者）は全学生の 2.7%であり，直接把握された自殺および精神障害学生の約20%はこの中に含まれていた。

長期留年者に精神障害学生が多いと言われていることから，判別関数を用いて留年についても検討した。これは２つの集団（この場合進学と留年）をできるだけ弁別しやすくするような関数を求めようとするもので，進学群と留年群が最も判別できるようにそれぞれの項目に重み値をつけた。このUPI，SCTの重み値からみると，進学傾向群と留年傾向群とは明らかな相違を見，また両テストには意味的に違った面が出てきていて，これらテストから引き出された意義をあわせることによって，精神的不健康学生をより明確，全体的に把握することができるようになる。一方UPIの重み値より算出した判別得点分布をみると，その判別能力は十分とは言えないが，全学より学部別，１年以上留年より２年以上留年と判別精度はあがった。以上のことから，質問紙法であるUPIに投影性を持つＳＣＴを加えた相補的検討が有効であると思われた。

〔総　　括〕

Ⅰ．以上の成績から，UPIは学生の自殺，うつ病圏疾患，精神神経症の予知のためのスクリーニング・テストとして有効であると考えられる。またUPI，SCT両テストの併用は，精神障害学生を予知するための一次スクリーニングとして有効な方法であると考える。

Ⅱ．留年の場合もその判別能力は不十分とはいえ，これらテストの各項目につけた重み値の傾向や，学部別長期留年者の傾向などをみても，この判別関数による留年傾向群と進学傾向群ではその特徴が明らかに異り，UPIとSCTの併用でその判別の精度は高め得るものと思われる。さらにこの留年の分析から，両テストは質的に異った構造を解析する方法であることも一層明確となった。

Ⅲ．以上のUPI，SCTを通して得られた資料による学生の心理理解が，今後のスクリーニングの精度を高めることに役立つと考えるが，これらのスクリーニング・テストをより臨床に結びつけるべく，スクリーニングした者をいかに指導するかをさらに検討していくことが今後の大学における精神衛生の充実につながるものと考える

論文の審査結果の要旨

大学生には，精神障害による休学者や自殺者が多いが，早期発見，早期治療のみならず，その発生を予防することは重要な課題である。著者は，これらの対策の一環として行っている心理テスト〈UPI（University Personality Inventry）・SCT（Sentence Completion Test）〉の有用性について，総合的な検討を行った。その結果，UPI，SCTともに精神的不健康学生の予知に有用であること，さらにより簡便なUPIについては，その予測基準を明確にするとともに，従来からある程度の判定基準が得られているＳＣＴとの併用で，その予知精度を高め得ることを明らかにした。また，この両テストは質的に異なった構造を解析する方法であることを一層明確にしたもので，学位論文として十分価値あるものと認める。